OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	静謐な『中世文学論研究』大成者の面影 ： わが師・田中裕名誉教授を悼む
Author(s)	三村, 晃功
Citation	語文. 2017, 108, p. 1-5
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71001
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

静謐な『中世文学論研究』大成者の面影

――わが師・田中裕名誉教授を悼む――

三村晃功

筆者はさる平成二十九年三月十九日、岡山県勝田郡奈義町文化センターにて開催された、「今も生きている巨人　伝説さんぶたろう　出版記念講演会」で、「『三穂太郎記』の形成―古典和歌の関係する恋愛譚をめぐって―」の演題で講演を行なったのち、久しぶりに故郷の高梁市成羽町の実家にまで足を延ばして、自然環境の真っ只中に身を置くという贅沢な暮らしを満喫した。

ちなみに、この講演は、筆者が津山高校時代の教え子の入澤知子さんが、地元に伝承する「さんぶたろう」の伝説の実態を、さらに詳細に解明して故郷の文化発展に寄与したいとの郷土愛から、当該伝説には和歌が多数含まれている関係で、その視点から考察すれば何か明らかになるのではないかと発想して、古典和歌を専門にする筆者に依頼してきたことに端を発する。そこで『三穂太郎記』を対象に考究した結果、筆者は「さんぶたろう」の両親が和歌の贈答を中心に描出された恋愛譚の部分が、江戸時代後期に当地に在住していた歌人・有職故実の大成者たる皆木保実によって記述された著作であることを発見して論証したわけだ。

そのような次第で、筆者は講演の無事終了と故郷の自然を充分に満喫するという満足感に浸りながら、実家で三日ほど悠々自適の生活を送ったのち、二十三日の午後四時ごろに、現住する宇治の茅屋に到着したのであった。

すると、大阪大学大学院日本文学・国語学研究室の新井由美助教から速達が届いていて、「本年一月十九日、本学名誉教授の田中裕先生がご逝去されましたことは、新聞の訃報などで既にご存知のことと思います。（中略）次輯『語文』誌上にて先生のご遺徳を偲び、追悼文を掲載させて頂きたく、三村先生におかれましては是非とも玉稿を賜りたく存じます。」とあるではないか。筆者は日ごろ新聞紙面にはよく目を通しているほうだが迂闊なことに、今回の恩師・田中裕先生のご逝去の記事にはまったく遭遇していなかったので、ビックリ仰天してしまった。

ところで、恩師・田中裕先生といえば、和歌の注釈書『新古今和歌集』（新日本古典文学大系、岩波書店）をはじめ、『中世文学論研究』（塙書房）『後鳥羽院と定家研究』（和泉書院）などの学術研究書によって江湖に周知された中世文学研究の泰斗であられるが、筆者との邂逅、結び付きは以下のとおりである。

まず、筆者は昭和十五年九月生まれで、岡山大学法文学部文学科を同三十八年三月に卒業して、同年四月に大阪大学大学院文学研究科に入学した所謂、外様の大学院生である。そして、学部生の時には、東北大学で日本文芸学を樹立した岡崎義恵教授の薫陶を受けた後、岡山大学で『源氏物語』の研究で活躍されていた、森岡常夫教授に師事した関係で、筆者は「『源氏物語』の崇高美」なる卒論を執筆して卒業した。したがって、大学院は東北大学へ進学するように森岡教授から推薦されていたのだ。

しかし、筆者は元来、寒冷地が苦手な体質だったため、温暖な地域に良い大学院はないものか、とお尋ねしたところ、森岡教授は阪大に、小島吉雄教授・田中裕助教授などの文学性を重視した研究方法で著名な陣容を揃えた大学院がある、と返答されたのだ。

という次第で、筆者はこの両大学院へ願書を提出したが、入試日程が先行していた阪大に合格したゆえに、森岡教授には申し訳なかったが東北大を受験することなく、筆者の進学先は阪大に決定したわけだ。

こうして筆者は阪大大学院の修士課程で、豪華な教授陣のもとで指導を受け有意義な二年間を過ごしたのち、修士論文発表会へと臨んだ。筆者の修論は「『源氏物語』における宇治の大君の造型と作者の精神機構」なるものだったが、それは学部の卒論の延長線で『源氏物語』を対象に選び、田中助教授に指導を仰ぎながら種々格闘していたからだ。

ところで、この修論発表会では、発表者が利用できる所要時間がほぼ三十分程度でしかなかったのに、筆者はあまりの緊張感からか、ほぼ四倍の二時間強をも要してしまったのだ。

にもかかわらず、田中先生は筆者の発表中にはまったく口を差し挟まれることなく、発表後に小さな声で、「発表会全体に迷惑を及ぼすから、今後は時間には注意して発表したらどうですか」と忠告するに留まったのだ。

筆者は、通常ならば決して許容されることのない、我が大失態に穴があったら入りたい心境だったが、それ以上に感歎、感激したのが田中先生の至極寛容な応接態度で、筆者はこの事象から田中先生を、世間ではめったに遭遇しえない、絶対的な静謐な心の教育研究者の鏡だ、と心の中で反芻、礼賛して已まなかった。

これが筆者の心奥に強烈に残っている、田中先生を披露する際に、真っ先に紹介しなければならない第一のエピソードだ。

この修論発表会の後、筆者は田中先生のご自宅を訪問して、今後の進路について相談した結果、博士課程に進学してもいい旨、懲懃していただいたが、残念至極なことに、筆者の無知と不手際によって折角の博士課程への進学は虚しく水泡に帰することになって、昭和四十年四月から筆者は岡山大学付属図書館にて、同

年度に文部省から同館に交付されていた科学研究費を我が給料に充当して、池田家文庫の整理に従事する羽目に陥ったのだ。

しかし、筆者は池田家文庫の整理を担当したお陰で、文献学の知識を実地で習得できたうえに幸運にも、『六花抄』なる和歌の注釈書を新発見して、専門分野を『源氏物語』から中世和歌に変更する機会にも恵まれることとなったのだ。

すなわち、この古典和歌なる専門分野は意外にも、筆者の体質・性向に合致・適合して、筆者はこれを契機に専門領域を当面、「私家集名を冠する中世私撰集」および「中世類題集」に特定することができたが、さらに個々の論文題目をも種々具体的に決定することができて、大袈裟に言えば、「魚の水を得たるがごとし」の諺に譬え得る喜びを実感したのであった。

こうして、筆者は一年後の昭和四十一年四月、岡山県立津山高校にて非常勤講師を一年間勤めたのち、翌年四月から同高校教諭として同四十九年三月まで精励したが、父親の突然の逝去によって、同年四月から同県立高梁高校に転勤することになり、同校に三年間勤務した後、同五十二年四月、京都の花園大学へと転出することになった。

この十年余りの高校教員時代には、教育実践として現代国語、古文、漢文の授業に精魂を尽くして頑張ったが、それ以上に筆者が喫緊の目標にしたのが、岡山大学付属図書館時代に見出だした研究テーマを学術論文に仕上げることで、筆者はこの目標を目指して、寸暇を惜しんで精勤することに邁進したのであった。

ちなみに、修論発表の拙稿は、阪大国文大学院研究誌『文車』（第13号、昭和40・3）に掲載されたが、定期刊行物として世間に名を馳せていたのは、大阪大学国文学研究室編輯の『語文』のほうで、駆け出しの大学院修了生には敷居が高い学術雑誌だ、と先輩がたから仄聞していたので、筆者が高校教員時代に目指したのは専ら、京都大学文学部国語学国文学研究室編集になる『國語國文』であって、この時代に同誌に掲載された拙稿はつぎのとおりだ。

○「岡山大学所蔵『六花抄』について」（第38巻第8号、昭和44・8）
○「『六花集』の性格と価値」（第40巻第9号、同46・9）
○「『明題和歌全集』の成立」（第43巻第7号、同49・7）
○「『大納言為氏卿集』の成立」（第45巻第5号、同51・5）
○「松平文庫所蔵『光俊集』の成立」（第46巻第3号、同52・3）

なお、昭和五十年七月には、中四国中世文学研究会のメンバーによる同人誌『中世文学研究』が創刊されたが、筆者は同誌が平成十一年八月に第二十五号で終刊されるまで、毎号一本の論文を執筆、掲載された。また、花園大学時代には、学術論文は勤務校が発行する紀要、雑誌を最優先にすべきだ、と筆者は常時主張していたので、昭和五十二年四月から平成二年三月までの十三年間に、論題は省略するが、文学部が編集発行する『花園大学文学部研究紀要』に八本、花園大学国文学会が編集発行の『花園大学国

文学論究』に九本の計十七本の論考を執筆して掲載された。

このように筆者の論文執筆活動は順調に進展するなか、昭和五十五年度で定年退職を迎えられる田中教授を祝う記念誌に投稿するよう要請があって、筆者は早速、「書陵部所蔵『資賢集』の成立」を提出したが、何故か刊行された『語文叢誌』（昭和56・3）には、総数四十本の論文の中に拙稿は見出せなかったのだ。

この現実に筆者はひどく落胆したが後日発行された、『語文』第三十八輯（昭和56・4）の目次を見ると、「田中裕・小島吉雄・島津忠夫・片桐洋一・三村晃功・表章・川端善明・山口堯二・前田富祺・寺島樵一・信多純一」のごとく、阪大関係の教授陣に伍して、大学院修了生では筆者と寺島氏の名前があるではないか。

この英断は田中先生の後継者たる信多教授の采配かも知れないが、もし田中先生だとしたら、これが筆者の心奥に深く刻み込まれた、田中先生を想起する第二番目の強烈なエピソードだ。

なお、筆者はこれを契機に『語文』にも投稿して掲載されたが、その拙稿はつぎのとおりだ。

○「『隆季集』の成立」（第41輯、昭和58・5）

○「散る別れこそかなしかりけれ―西行の新古今歌一首私解」（第48輯、同62・3）

○「名古屋大学図書館蔵『いざよひ物語』の成立」（第53・54輯、平成2・3）

○「『摘題和歌集』の編者考―細川高国の可能性」（第59輯、同4・10）

○「北駕文庫蔵『類題和歌集』の成立」（第71輯、同10・10）

こうして花園大学時代は旺盛な論文執筆活動で首尾よく進展しているなか、昭和五十八年の暮れごろ、徳島大学の教養部長から電話があって、同五十九年四月に国文学研究資料館に転出する小峯和明氏の後任に着任してもらいたい旨告げられた。

筆者は、この要請を家族の諸般の事情で丁重にお断りしたが聞けば、今回の人事は田中教授と早稲田大学の藤平春男教授ほかの推薦があっての打診だと、教養部長から内情を明かされた。

ということは、この人事案件は当該人物には事前の了解なしに進められていたうえに、当事者は埒外に置かれていたわけだ。

しかし、筆者にはこの人事案件から、田中教授の弟子への深遠な思いやり精神が如実に実感されて思わず感激したが、これが筆者の田中先生を偉大な教育者だと認定する、第三番目のエピソードになった。

さらに、花園大学時代の特筆事象として、筆者は懸案の私家集名を冠する私撰集の解明を論述した、『中世私撰集の研究』（昭和60・5、和泉書院）なる単著を刊行することになり、田中先生に表題と著者名の揮毫をお願いしたところ、筆者の予想に反して即座に、二つ返事で快諾してくださったのには真実、驚愕した。

この田中先生の直截的な振舞は、師の自信と心腹の広さを物語る快挙で、筆者はこれを第四番目のエピソードと考えている。

なお、筆者は後年、学位論文申請に提出した『中世類題集の研

究』（平成6・1、和泉書院）も、田中先生に表題と著者名を揮毫していただく栄誉に浴したが、揮毫入りの拙著を送付したところ、先生からこの内容なら大丈夫なる返事を頂戴して感激したのを鮮明に覚えている。その後、筆者は両著を手にするたびに、師のにこやかな温顔を想起して感慨無量の思いを禁じえないのだ。

さて、筆者は平成二年四月、光華女子大学へ転出したが、その理由は前任校にて、図書館長候補に選出される椿事に遭遇したためだが幸い、館長には同数票の年長者が就任して事無きを得た。しかし、次年度に管理職が回ってこない保障が皆無ゆえに、筆者は管理職を選挙では選ばない不文律の光華へ転任したわけだ。

ところが不運なことに、筆者の着任後しばらくして、この不文律が廃止され、筆者は同十年四月に教務部長、同十一年四月に文学部長、同十三年四月に大学院文学研究科長、同十五年四月に学長に選出されて、学長任期満了の同十八年三月まで連続九年もの長期間にわたって管理職に就任しなければならなかったのだ。

とはいえ、これも我が宿命だと覚悟して、毎朝五時に起床しては懸命にルーチンワークをこなしながら、論文執筆にも精励していたある日、阪大国文学会に久しぶりに出席したところ、田中先生に偶然、拝眉の機会を得たのだ。早速、筆者は数編の拙稿を話題に上せると、先生は拙論のいずれをも細々と詳細な感想と適切な批評を加えて論断してくださったのだ。

この恩師の生きざまに、筆者は退職後の然るべき理想的な教育研究者魂を目の当たりにして感動すら覚えたが、これが筆者の田中先生を語る第五番目のエピソードである。

なお、その後の筆者の研究者人生は、平成二十三年三月に京都光華女子大学を退任するまで連続するが、その点の叙述は省略に従うことをご了承していただきたいと思う。

以上、筆者は恩師・田中裕名誉教授との邂逅、結び付きの視点から、その大半を自分自身の研究者人生に焦点を合わせて、回顧録ふうに叙述してきたが、これも田中教授なる偉大な研究者としての理想像があったからにほかならない。

ここで改めて、筆者に係る田中裕名誉教授の五つのエピソードから窺い知られる、その人物像に言及すれば、田中先生は溢れる情熱を内に湛えながら、寡黙にして理性的判断に基づく実行力を伴った、静謐な心の教育研究者の鏡と要約できようか。

最後に衷心より田中先生のご冥福をお祈り申し上げる。合唱

（みむら・てるのり　京都光華女子大学名誉教授・前学長）